

第19回

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

一般財団法人 国際開発機構 **FASID**

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、1997年に創設されました。

第19回(2015年度)の受賞作品が下記の通り決定しましたのでご紹介します。



古川 光明 著

『国際援助システムとアフリカ

-ポスト冷戦期「貧困削減レジーム」を考える』

(日本評論社) 2014年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
- 原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
- 深川由起子著『韓国・先進国経済論 -成熟過程のミクロ分析-』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
- 辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合 -構造調整政策下における役割と育成-』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 西川 潤著『人間のための経済学 -開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
- 第6回 石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 脇村孝平著『飢饉・疫病・植民地統治 -開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第7回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
- 第8回 石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 安原 毅著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
- 第9回 藤田幸一著『バングラデシュ農村開発のなかの階層変動: 貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染 -バングラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学 -ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著『現代アフリカの紛争と国家 -ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著『カーストと平等性 -インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当作なし
- 第16回 佐藤百合著『経済大国インドネシア -21世紀の成長条件』中央公論新社 2011年
- 第17回 森 壮也・山形辰史著『障害と開発の実証分析 -社会モデルの観点から』勁草書房 2013年
- 山尾 大著『紛争と国家建設 -戦後イラクの再建をめぐるポリティクス』明石書店 2013年
- 第18回 柳澤 悠著『現代インド経済 -発展の淵源・軌跡・展望』名古屋大学出版会 2014年

審査委員選評

国際開発研究大来賞の目的は、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を提供する優れた研究図書を顕彰することにある。受賞作品は「貧困削減レジーム」の援助行政メカニズムをアカデミックに鋭く明快に解明して、新たな方向性を示したものであり、まさにその目的にかなうものである。

本書は開発援助の実務者による学術研究書であるが、その学術的価値は、明確な問い、社会科学的方法論と実践可能な結論の提示にある。まず、「貧困削減レジーム」の見直しが進むのは貧困削減レジーム自体に欠陥があるのか、それともレジームが徹底されていないためなのかという問題意識が明確である。

研究方法においても独自性が際立つ。貧困削減レジームのきっかけとなったいわゆる「プロジェクトの氾濫」は経済成長や貧困削減にどのような影響を与えたか、一般財政支援 GBS の成果は実際にはどうであったか、などについて、乳児死亡率と初等教育修了率、経済成長率などを使いつつ定性的・定量的に分析している。ドナーと途上国政府の関係の変容過程、「援助の政治」と「実施の政治」の乖離など、「貧困削減レジーム」の実態を解明してゆく方法は見事であり、印象的な図表の使用も説得力を増している。実践面での応用性であるが、著者の問題意識が JICA タンザニア事務所の実務の中で生まれたこと、ドナーと途上国政府の関係者の意識と行動を熟知していることもあって、本書の提示する結論と今後への示唆は現実的である。中国など新興ドナーや民間企業との連携の必要性の指摘もうなずける。

本書は国際水準を満たす本格的学術研究書であり、日本だけでなく外国の開発援助の研究者・実務者にも広く読まれるべき作品である。選考委員会でも満場一致で決まった今回の受賞を、開発研究の将来にとっても明るいニュースとして祝いたい。(滝澤 三郎)

受賞者の言葉

開発援助に携わる者としてこの度の大来賞の受賞は、大きな喜びとともに、身の引き締まる思いです。選考委員の先生方、これまで研究を支えてくださった方々、そして、本書の出版にあたってお世話になった皆様に心からお礼申し上げます。

私は、長年、開発援助を実施する実務者として途上国と接してきました。そのなかで、本書を執筆するにあたり、これまでの開発援助に関わってきた経験のなかで常に自問してきた問いかけがありました。特に、1997年から2001年にかけて JICA タンザニア事務所で勤務をした際の現場での経験が大きく影響しています。赴任して間もなく、初めて参加した保健分野のドナー会合において、他のドナースタッフから、なぜ、日本はいまだにプロジェクト援助をするのかとの批判を受けました。これまで日本が自信を持って実施してきたプロジェクトが大きな批判にさらされていることをそのとき初めて知り、困惑しました。1990年代以降、国際社会は、貧困削減を共通の目標とし、援助国間で協調して援助効果向上の取組を一定のルールに従って行う体制「貧困削減レジーム」が形成されてきましたが私が赴任した折は、まさに、タンザニアにおいても「貧困削減レジーム」の形成に向けての取組みが本格的になされていた時期でした。

その後、国際開発援助コミュニティでは、貧困削減、「援助効果向上のための取組み」に向かって様々な議論や取り組み、そして、合意がなされていくことになりました。そのなかで、本当に「貧困削減レジーム」は効果的なものなのか、新たに導入された一般財政支援は有効な援助形態なのか、そして、「貧困削減レジーム」は、国際開発援助にとってどのような意味を持ち、途上国政府やドナーは、どのような視点でこの制度に取り組んでいるのかといった開発援助に携わるものとして当然、理解しておくべきことが、実は、開発援助を担うドナーにおいても十分に検証されていないままに、新たな取り組みがなされているのではなかろうか、さらに、開発援助を実施するものとして、このなぞを解くことなしには今後の援助の方向性を見定めることができないのではないかとの思いを次第に強くするようになりました。このような思いから取り組んだのが本書です。

本書の執筆にあたり、また、現在、南スーダンという現場で実務をするなかで、実務と研究が一体となって取り組んでいくことで検証に裏付けされた良い援助ができると確信しています。それはとても難しい作業ですが、今回の受賞は、大来先生の国際開発への情熱を少しでも受け継ぎ、少しでも良い援助ができるよう研究と実務をさらにつなげなさいという励ましと受け止めております。それに応えるべく、努力していきたいと存じます。

古川 光明



ふるかわ みつあき

1962年大阪府生まれ。1987年法政大学経済学部卒業後、清水建設株式会社を経て、1989年国際協力事業団(JICA)入所。タンザニア事務所次長、英国事務所長、JICA研究所上席研究員などを経て、JICA南スーダン事務所長。1997年米国デューク大学大学院公共政策学部修士、2014年一橋大学より博士号(社会学)。

主要論文

“Management of the International Development Aid System and the Creation of Political Space for China: The Case of Tanzania” *JICA-RI Working Paper*, No.82, 2014.

“Is Country-system-based Aid Really Better than Project-based Aid? Evidence from Rural Water Supply Management in Uganda” *JICA-RI Working Paper*, No.64, 2014 (with Satoru Mikami).

「貧困削減戦略における紛争予防配慮の可能性」『国際協力研究』24(1)、JICA、2008年。
「脆弱国家における中長期的な国づくり国のリスク対応能力の向上にむけて」『アフガニスタン事例研究』JICA、2008年他。

第19回 応募作品の傾向と選考経緯

2014年4月から2015年3月までに出版された国際開発分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として公募したところ、78件75作品の推薦・応募があった。(3作品は複数名から推薦された)

本年度応募作品の特徴は、対象地域としては一国のみでなく、複数国/地域や国連機関を取扱う著作が多かった。アジアは例年通り多く21点(うち中国4点、ラオス・カンボジア3点、インドネシア2点)、中東は昨年より減じ4点、アフリカは例年より多い12点、南米や島嶼国、東欧が各1点あった。

分野は、経済/財政16点、政治11点、環境/資源7点、保健・医療4点が昨年より増えたが、災害/防災/難民は昨年より減じて4点であった。教育分野は、第17回から応募が無かったが、今年は3点となった。FASID国際開発研究センターにおいて予備審査を行い、受賞作品に加えて下記6点が最終審査対象として選出された。審査過程において審査委員から出された意見はおおよそ以下のとおりである。(書名五十音順)

上村 雄彦 著	『グローバル・タックスの構想と射程』 法律文化社
大沼 あゆみ 著	『生物多様性保全の経済学』 有斐閣
杉本 均 編著	『トランスナショナル高等教育の国際比較-留学概念の転換』 東信堂
竹原 憲雄 著	『日本型ODAと財政-構造と軌跡』 ミネルヴァ書房
西口 清勝・西澤 信善 編著	『メコン地域開発とASEAN 共同体-域内格差の是正を目指して』 晃洋書房
牧野 裕 著	『IMFと世界銀行の誕生-英米の通貨協力とブレトンウッズ会議』 日本経済評論社

『グローバル・タックスの構想と射程』は、グローバル公共財の供給コストを、将来的に重要となりうるグローバル税で賄うためのメカニズムについて先端的動向(EUによる金融取引税など)を示し、研究者や実務家に指針を提供している。地球規模問題解決のため、今後日本でも議論されるべき重要なテーマであり、より広く読まれるべき作品である。

『生物多様性保全の経済学』は、生物多様性保全に向けての経済学的アプローチを極めてわかり易く説明しており、特に豊富な事例は著者が蓄積してきた研究成果を活用している点が評価される。研究者と政策立案者に対して新たな視点を示し、国際開発論一般にも刺激を与える良書である。内容・文章いずれも非常にわかりやすく、環境経済学のテキストとしても優れている。

『トランスナショナル高等教育の国際比較』は、トランスナショナル高等教育(高等教育の世界的な展開)の国際比較により、各国における意味の違いや示唆を導き、問題提起したことは意義深い。本著ではトランスナショナル高等教育の課題、効用、問題点等を国別に分析整理しており、日本の高等教育政策の国際的展開検討の参考になるだろう。

『日本型ODAと財政』は、財政面から緻密に研究がなされており、分かりにくい日本の円借款や国際開発金融機関への支援の財政構造にも歴史的観点から分析・課題を提起している画期的な研究。長年にわたる丹念な研究成果であり、今日的な意義も大きい。ODAから開発協力の時代において円借款の役割の進化が求められる今、財政の視点から日本型ODAの変遷を理解することは重要で、多くの関係者が読むべき良書と言えよう。

『メコン地域開発とASEAN 共同体』は、2015年ASEAN経済統合の観点からタイムリーな著作。日本だけでなく各国研究者の視点から行なわれた国際共同研究の成果を知的生産物として刊行した意義は大きい。メコン・GMS地域(Greater Mekong Sub-region)だけでなく、開発に関心のある研究者や実務者にとって有用である。

『IMFと世界銀行の誕生』は、IMFと世銀創設にいたる英米の通貨外交について、膨大な史料分析により独自の解釈・知見の提示を行っている点が評価される。ブレトンウッズ体制成立の背景で、米国提案のIMF・世銀創設と、英国提案の清算同盟等の熾烈な交渉があったことを理解することは有用であり、研究者間では基本文献の一つとして普及するであろう。

【第19回(2015年度)審査委員会】

委員長	杉下 恒夫 (FASID 理事長)
委員	荒木 光弥 (国際開発ジャーナル社代表取締役・主幹)
	絵所 秀紀 (法政大学 教授) 大野 泉 (政策研究大学院大学 教授)
	滝澤 三郎 (東洋英和女学院大学大学院 教授、国連難民高等弁務官事務所 元駐日代表)
	岡田 尚美 (FASID 専務理事)

表彰式・記念講演会

案内状
http://www.fasid.or.jp/award_detail/3_index_detail.shtml

日 時	2015年12月8日(火) 15:00~16:15
講 演	冷戦終結後の国際開発援助体制の課題と展望 「貧困削減レジーム」を中心に 古川 光明
会 場	FASID セミナールーム (港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階) 地図 http://www.fasid.or.jp/about/8_index_detail.shtml
参加費	無料(要申込・座席定員制) ※表彰式・記念講演に続いて、懇談会を同会場で開催します。
申込み	okita@fasid.or.jp ※お名前・ふりがな、ご所属、電話(昼間連絡できる先)をe-mailにてお送りください。

国際開発研究 大来賞

OKITA Memorial Prize for International Development Research

受賞候補作品 募集のご案内

「国際開発研究 大来賞」は、国際開発の分野における研究奨励と促進、良書の発掘に資するため、国際開発の様々な課題に関する優れた指針を示す研究図書を顕彰するものです。

第20回(2016年度)についても、みなさまからのご推薦・ご応募をお待ちしております。

対象となる作品

- (1) 開発援助を含む国際開発の分野における課題を主たるテーマとする日本語の研究図書(翻訳、随筆、エッセイ、体験記、自伝、紀行文、事業報告書等を除く)であって、国際開発の実践活動の向上に資するもののうち、特に斬新性、普及性の点で顕著な業績、貢献が認められるもの。
- (2) 個人又は団体が編者あるいは著作者の場合は、個人の執筆者名が明記されているもの。
- (3) 2015年4月1日から2016年3月31日までの間に、初版が国内で市販されたもの。

大来 佐武郎(おおきた さぶろう)氏

1914年旧満州大連市に生まれる。1937年東京帝国大学工学部卒業、逓信省入省。戦後は経済安定本部、経済企画庁においてエコノミストとして活躍。1963年に同庁総合開発局長退官、1964年日本経済研究センター理事長就任、南北問題や開発援助分野で活躍。国際開発計画委員会(ティンバーゲン委員会・ピアソン委員会)の委員や『成長の限界』を刊行したローマクラブのメンバーを務める。1971年国際開発センター理事長、1973年海外経済協力基金総裁などを歴任し、1979年の大平政権において外務大臣を務める(～80年)。その後も国際大学学長、対外経済問題諮問委員会座長、FASID初代評議員会会長、国際開発学会会長等、国際開発分野で数多くの足跡を残す。1993年逝去。

審査・表彰

表彰 審査委員会で選考された作品に対し、正賞(楯)と副賞(50万円)を贈呈します。

審査 当財団国際開発研究センターによる予備審査を経て、審査委員会が行ないます。

推薦者(自薦・他薦可)は、所定の応募用紙へ入力し、e-mail添付により送信とともに、当該図書2冊を添えて応募・推薦してください。なお、応募書類・当該図書は返却致しませんのであらかじめご了承ください。

応募用紙 ダウンロードしてください。

http://www.fasid.or.jp/award_detail/2_index_detail.shtml

締切 2016年6月3日(金)

受賞作品の発表と表彰式

2016年11月に推薦者へ通知、発表し、表彰式(2017年1月頃)を行います。(予定)

推薦・お問合せ先

一般財団法人 国際開発機構

国際開発研究 大来賞事務局(服部)

TEL:03-6809-1997 e-mail:okita@fasid.or.jp